

私に力をくれたもの

宮城県大河原町立大河原中学校

三年 山田 里 桜

自分がいやになった時。心が苦しくなった時。そんな時、いつでも私の側にあつて、必ず力をくれたもの。ありきたりではありますが、私にとつてのそれは、私の家族であり、家族が与えてくれたものであり、中でも特に力をくれたのが、姉という存在でした。

私の生まれた家は、非常に個人というものを尊重してくれる家でした。相談をすればアドバイスをくれて、間違つた時には正しい道を示してくれる。厳しすぎるわけでもなければ、甘すぎるわけでもない。あくまでも、個人としての自由を認めてくれる、そんな家でした。だからこそ私は、自分の意見というものを持てる人間になることができたんだと思います。だけど私は、何も小さい頃からそんな強い人間だつたわけではありません。

きっかけは小学三年生の秋でした。それまでの私はひどく心配性な人間で、一つの行動をとるのにも散々悩むような、多少言い方を変えるのなら、自分の考えに自信が持てない人間でした。もしこれをしたら、誰かの迷惑になってしまうのではないか。ここでこう言つたら、いやだと思つてしまう人がいるかもしれない。四六時中そんなことを考え、びくび

くしながら生活をしてきた覚えがあります。そんな私の目に映つたのが、当時小学六年生だつた姉の、鼓笛隊の指揮をする姿でした。

元々私とは反対に、いつも樂觀的で、ニコニコしていて、器用で、ちょっとどこかぬけている姉は、私にとつてずっと憧れでした。楽器もできて、性格も良い。きっと私はそんな姉がいることに満足して、自分がどうなるかなんて、全く考えていなかったんだと思います。でもそれは、姉になぜ指揮者になつたのかを尋ねた時に、あっけなく散りました。「だって、人は人じゃん。やつぱり、後悔する人生を送るよりもさ、あー、悔いなく生きたなあつて、達成感とか満足感とか、そういうのを感じて生きたいじゃん。」

その言葉が、私の考えを変えたのでした。もしかしらば、本当に本当にもしかしたら、私も誰かの役に、立つことができるかもしれない。これをするこゝとで、ここでこう言うことで、救われる人だつているのかもしれない。と。もしも間違つた道を進んでいくとするなら、そんな私を止めてくれる人がいてくれれば良い。否、もういるじゃないか！と。

その日を境に、私はいろいろなことに挑戦するようになりまし。発表会の木琴、集會委員会、クラブ活動のクラブ長に、今やつている生徒会。その時の自分のできる最善策を、その時に出せる全力で、ぶつかりにいこうと、そう思うようになったのです。

今、私のまわりには、家族がいます。手を差し伸べてくれる仲間がいます。私を励ましてくれる存在が、間違いを指摘してくれる存在が、共に泣き、共に喜んでくれる存在があります。そんな人達がいるだけで、そこにいてくれるというその事実だけで、私はどんなことでもできるような、そんなふう

に思えてくるのです。きっと昔のままの私では、今私を感じているような充実感、感じる事ができなかったはずで。

私に力を与えてくれたものはもう一つあります。それは、本の存在。本の中の世界はいつも不思議にあふれていて、私のことをわくわくさせてくれました。でも心のどこかでは、その話は全部ありえないんだ、ということも分かっていました。しかし、私の好きな本のあとがきを久しぶりに読み返してみると、そこに書かれていたのは可能性についての話でした。

限りというのは、自分でつくつてしまうもの。本来、「できないこと」なんてものはない。ただ、「やろうとしない」だけ。そこには、そう書かれていた。それが見た時、私の心はざわつきました。できないのが普通。そんな考えが、自然と芽生えていたからです。「できない」っていうのはただの都合の良い言い訳で、やろうとできないことはない。可能性は、正に無限大だから。それを知った時、私は自分の中の何かを破つて成長したことを、確かに感じました。そこから私の、何事にも全力で、当たつて砕け散るくらいの覚悟で挑もうという考えが生まれたのです。

私に力をくれたもの。今の私を形づくっているもの。それは、私のこの、まだまだ短い人生を、これでもかつていうくらいにカラフルに色づけてくれたもの全て。仲間でもあり、家族でもあり、ものでもあり、どこかの全く知らない人のおかげでもあるのかもしれない。ただ一つ言えることは、そのどれかが欠けたら今の私はいない。つまり、その何もかもに対して、感謝の気持ちでいっぱいということだと思います。